

## モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目(3)

奥村真理子

### III. 『エッセー』初版における歩行の比喩

われわれは拙論(1)<sup>1)</sup>において自己と他者の違いを捉えるモンテーニュの視線について、(2)<sup>2)</sup>において他者どうしの差異を表す視線について、『エッセー』初版のテキストを中心に考察したが、いずれの場合も歩行の比喩が密接に関わっていた。初版出版から8年後に出版する第3巻の「人相について」の中でも、モンテーニュはソクラテスの生き方を、騎行する小カトーの緊張した行き方と対照的に、ゆったりとした地上歩行として次のように描くことになる。

Car en Caton, on void bien à clair, que c'est une alleure forcée, & tenduë bien loing au dessus des communes: aux nobles exploits de sa vie, & en sa mort, on le sent tousjours monté sur ses grands chevaux. Cettuy-cy ralle à terre, & d'un pas mol & ordinaire, traicte les plus utiles discours, & se conduit & à la mort & aux plus espineuses traverses qui se puissent presenter au trein de la vie humaine. (III, 12, *D.M.*, 459 v<sup>o</sup>.; *V.L.*, pp.1037 -1038.)

学問に頼らないソクラテスの気負わない生き方を表現する普通の歩みに類似する比喩は、拙論(2)で扱った「術学について」の章で術学者と対比された庶民の素朴な行き方の叙述に既に見られる：〈le paisant & le cordonnier vous leur voyez aller simplement & naïvement leur train parlant de ce qu'ilz sçavent〉。さらにそのような庶民と、学問で身を鎧おうとする術学者〈pour

se vouloir eslever & jandarmer de ce sçavoir, qui nage en la superficie de leur cervelle 》との対比は、同じく「人相について」の中の、死に対し学問で鎧う「われわれ」と、学識によらず剛毅さと忍耐を示す農民との対比と重なり合う。しかもここに、「術学について」における古代の高邁な哲学者の俗世間への「見下し」と対照的な「見下ろす視線」が提示される。

A quoi faire nous allons nous gendarmant par ces subtilitez, & efforts de la science? regardons à terre, les pauvres gens que nous y voyons expandus la teste penchante apres leur besongne, qui ne sçavent ny Aristote ny Caton, ny exemple ny precepte, de ceux là tire nature tous les jours des effects de constance & de patience, plus purs & plus roides, que ne sont ceux que nous estudions si curieusement en l'escole.(D.M., 460 v°.; V.L., p.1040.)

「地面を見よう regardons à terre」という言葉は、単に農民たちがそこにいることを示しているのではない。学問に頼らず有益な事柄を扱うソクラテスも「地面を行っている ralle à terre」。ストア哲学の教えを実践する小カトーの騎行と学問なしで生きるソクラテスの歩行の対比においても、学問に頼るわれわれと無学な農民の対比においても、モンテーニュが読者に提示する視線と、対照的な二種類の行き方の比喩が結びついている。それは既に初版のテキストに見出されるのだ。本論では1580年以前にモンテーニュが【エッセー】において用いた歩行の比喩について考察を試みたい。

### 1. 歩行に関わる語彙

【エッセー】のコンコルダンスに添えられた語形別使用頻度順リスト<sup>3)</sup>を参照すると、68ページに及ぶリストのうち使用回数60未満が64ページを占めている中で、train (単数形) は96回、pas は92回で3ページめに、voie (単数形) は58回で4ページめに載っている。さらに、同コンコルダンスを用いてこれらの語と chemin および passage の単複両形の合計を出してみると、train:98, pas:92, voie:66, chemin:60, passage:58 である。上記の語形別リストとの単純

な比較はできないし、名詞の統計のみでは不十分だが、歩行に関わる語彙の使用頻度は高い方に属するのではないか。モンテニューの比喩は動詞によるものが多いので<sup>4)</sup>、動詞に関する調査を、昨秋(1997年)ようやく発売された、パソコンで語彙検索ができるモンテニューのコーパス CD-ROM を利用して行いたいところだが、残念ながら持っていないので今のところ断念せざるを得ない。

執筆時期別の使用頻度はどうだろう。上記のコンコルダンスを頼りに上の名詞をはじめ幾つかの名詞について数えてみる。なお同コンコルダンスはテキスト年代表記に誤りが多いヴィレー=ソーニエ版に依拠しているため、初版、1588年版とボルドー本のファクシミリ版<sup>5)</sup>で確認してできる限り正確を期したが、手作業のため自信はない。またテキストA, B, C別の数字は最終的なテキストにおける数字であって、各版における数字ではない。途中で削除・変更された語の統計調査は現段階では諦めざるを得なかった。したがって、あくまでも近似値的な数字として参考にすることにしたい。項目は単数形で記すが数値は複数形を含む。(Cf. 表1) route, allure, marche 以外は合計の約半数またはそれ以上が、また11語の合計の約半数がテキストAである。これらは歩行に関わる語彙のごく一部にすぎないが、「エッセー」における歩行に関する語彙のうちのかなりの割合が初版で既に用いられていると推測できるのではないか。

〔表1〕	合計	A	A' *1	B	C
pas	92	42	2	23	25
train*2	89	42	0	29	18
voie	66	38	0	23	5
chemin	60	32	1	19	9
passage	58	30	0	15	13
route	37	10	1	19	8
allure	16	1	0	8	7
carrière*3	12	8	0	1	3
démarche*4	7	5	0	2	0
sentier	6	6	0	0	0
marche*5	5	0	0	1	4
合計	448	212	4	140	92

\*1 A' は1582年版。

\*2 「供回り」の意味での使用数9を差し引いた数。

\*3 「石切場」の用法1を除く。

\*4 ヴィレーによれば *démarche* はCで3箇所 *marche* に換えられた<sup>6)</sup>。指摘に従って確認した結果を加えると A:7, B:3, C:0 となる。

\*5 A:3, B:2, C:6, 合計11から歩行の要素を含まない「段階」「ペダル」「社会階級」の用法6を除いた数値。

次に、テキストAにおけるこれらの語彙の用法を概観してみよう。上記の数字は具体的な道等を意味する使用回数を含むので、それを差し引いた数とその大まかな意味内容を見てみよう。(Cf. 表2)

## 【表2】

pas	26/ 42	生き方, 人生, 死ぬこと, 困難, 行為の度合 (loc. 多)
train	42/ 42	生き方, 方法・手段, 行為・事物の進行 (loc. 多)
voie	38/ 38	生き方, 方法・手段, 信仰, 本筋 (loc. 多)
chemin	16/ 31	人生, 方法・手段, 生き方, 勇気・徳の行き方, 文章, 本筋, 体内の薬の経路
passage	14/ 30	移行 (生から死, 死から生, 睡眠への), 「エセー」の受容, 存在の推移, 尿道, 喉・鼻孔, 耳孔
route	8/ 9	人生の進路, 友情の経過, 選択肢, 生き方, 考え方, 本筋
allure	1/ 1	魂の行き方
carrière	5/ 8	人生, 正道, 弁論, 詩作の過程
démarche	5/ 5	精神状態, 態度, 暮らし振り
sentier	4/ 6	信仰の道, 生き方, 人生の進路
合計	160/212	* (loc. 多) は慣用句を数多く含むことを示す

分母自体が上述のように参考数値なのでこれも参考程度の数値にすぎないが、かなりの割合で歩行と道に関わる語彙が比喩的に用いられていると思われる。特に人間の生き方や行為の仕方・方法を表すものが多いことが目に付く。ただしこれらの中には慣用句が多く含まれている。特に voie や pas や train を用いた表現の多くはラルース社の『中代フランス語辞典』やユゲの『16世紀フランス語辞典』に慣用句として記載されている。ではなぜ、例えば façon や manière や moyen (接続詞句以外の使用総数は各々211, 70, 240) 等ではなくこれらの語を含む言い回しを用いるのか。多様な語彙によって文章に変化をもたらすためだろうか。確かにモンテーニュはそうのように心掛けている。こうした配慮はコパン<sup>7)</sup>が指摘するとおりスボンの『自然神学』の翻訳にも見られる。例えば原文では iter が1回, via が9回も繰り返されている箇所を, モンテーニュは voie, sentier, chemin, carrière と訳語を工夫している<sup>8)</sup>。しかし文体的配慮だけが理由であるとは思われない。上記のコンコルダンスとファクシミリ版との対照作業の際、道や歩行を表す語彙どうしの書き換えには幾つか

出会ったが、他の種類の語彙との書き換えは稀だった<sup>9)</sup>。歩行に関わる語彙による表現が必要だったのではないか。道と歩行の比喩を用いた文章を具体的に見ていくことにしよう。

## 2. 「人生の道」と「死への移行」

人生を道に、死ぬことを生から死への移行に喩える表現は常套句であるが、単なる常套句の域を越えてモンテーニの思考回路に組み込まれている<sup>10)</sup>。それが最も顕著に現れているのが第1巻第20章「哲学することとは死ぬことを学ぶこと」である。拙論(2)で指摘したとおり、第1巻第42章「われわれの間にある差異について」を除き、セネカとの関係が強い章にはセネカにおいて重要な「高さ」の比喩が意外に用いられていない。ルクレティウスの『事物の本性について』とともにセネカの『書簡』からの引用と借用が数多くなされているこの章もそうである。セネカの『書簡』において「死の軽視」のテーマは「賢者の高みへの登攀」というテーマと密接に結びついている。死を軽視することは最高善の頂きに到達するための条件であり、そこに至った者はあらゆる情念も運命も眼下に見下ろすことができるのである<sup>11)</sup>。確かにモンテーニュも、情念を支配し運命がもたらす災難に動じない最高の自由には言及する。だが「人間業を越える」ことだと言い添えたうえで「できる限りこの利益を獲得しよう」と言うのみであり (I, 20, *D.M.*, p.114; *V.L.*, p.91), セネカのようにこれを目指して登っていくよう読者に促すことはしない。他方、セネカの「死の軽視」の論理は、人生を誕生と死が両端をなす道と見做す常套句を活用することによって成り立っているのだが、この「誕生と死が両端をなす人生という道」のイメージがこの章全体において大きな役割を果たしている。

まず、処刑場へ向かって歩まされる死刑囚が道中の景色を楽しみながら進めないことを示唆することによって、人間が死を必然的な終着地とする人生という道を歩んでいる以上、死の恐怖を取り除く必要があることを導き出す論法。

Nos parlemens renvoient souvent executer les criminels au lieu où le crime est commis. Durant le chemin, promenez les par toutes les belles

maisons de France: faites leur tant de bonne chere, qu'il vous plaira: pensez vous qu'ilz s'en puissent resjouir, & que la finale intention de leur voyage leur estant ordinairement devant les yeux, ne leur ait alteré & affadi le goust à toutes ces commoditez? Le but de nostre carriere c'est la mort, c'est l'object necessaire de nostre visée. Si elle nous effraye comme est il possible d'aller un pas avant sans fiebvre?(*D.M.*, pp. 97-98; *V.L.*, pp. 83-84.)

次に、死を考えない俗衆への《Il luy faut faire brider l'asne par la queue》という批判と、ルクレティウスの《*Qui capite ipse suo instituit vestigia retro*》という句の引用 (*D.M.*, p. 98; *V.S.*, p. 84)。これらは無論、前方の死を見ないように後ろ向きに人生の道を進むことを意味する。また、39歳という年齢で死という「遠い先のこと chose si esloignée」を考えるのは馬鹿げているかもしれないという自問に対しては、死は遠い先のことではない、寿命がそんなに長いと思いついでいるお前こそ馬鹿だと自答する。

D'avantage, pauvre fol que tu es, qui t'a establi les termes de ta vie? Tu te fondes sur les contes des medecins. Regarde plustost l'effect & l'experience. Par le commun train des choses, tu vis desja pieça par faveur extraordinaire. Tu as passé les termes accoustumés de vivre:(*D.M.*, pp. 99-100; *V.L.*, p. 84.)

死の準備をしておく必要性と、それに関して想定される反論への反駁において繰り返す、人間が死に向かって生の道を進んでいるイメージが活用されるのである。さらに、この章の中程を占める、死を常に想像することによって死に慣れ、死の恐怖を軽減する方法に関する叙述のあとも、この方法の有効性をめぐり議論においてこのイメージが活用される。いざ死に臨めばどんなに見事な方法でも役に立たないという反論に対してモンテーニュは、「動揺も身震いもせず死の所まで行けることは些細なことではない n'est ce rien d'aller au

moins jusques là sans alteration & sans fièvre」 と反駁する (*D.M.*, p.112; *V.S.*, p. 90)。また、論法を変えて、実際に死に近づけば自然に軽視できるかもしれないという期待を、病気の時の経験と、事物が近くよりも遠くから見るほうが大きく見えるというカエサルという言葉を引合に出して語るが、これも死へと向かって道を歩んでいる人間の生を前提とした考え方である。

Si elle(=mort) est autre je m'aperçois qu'à mesure que je m'engage dans ses avenues, & dans la maladie, j'entre naturellement & de moy mesme en quelque dessein de la vie. (….) Cela me faict esperer que plus je m'eslongneray de cele là(=vie), & aprocheray de cete cy (=mort), plus aisement j'entreray en compositon de leur eschange. Tout ainsi que j'ay essayé en plusieurs autres occurrences, ce que dit Cesar, que les choses nous paroissent souvent plus grandes de loing que de pres. (….) j'espere qu'il m'en adviendra ainsi de la mort. (*D.M.*, pp. 112-114; *V.S.*, p. 90.)

モンテーニュは死の軽視の最後の論拠として、人間に死を変更不可能な宇宙の秩序の一部として受け入れるよう諭す「自然」の教えを引合にだす。その論法にも道のイメージが活用されている。まず、死から生へ、生から死への道。

Mais nature nous y force. Sortez, dit elle, de ce monde comme vous y estes entrez. Le mesme passage que vous fites de la mort à la vie, sans passion & sans frayeur, refaites le de la vie à la mort. (*D.M.*, pp. 115-116; *V.L.*, p. 92.)

そして「自然」もまた、人間が誕生の日から死へと向かう道を歩んでいることを論拠とするのである。

Le premier jour de vostre naissance vous achemine à mourir comme à vivre. (*D.M.*, p. 116; *V.S.*, p. 93.)

Pensiez vous jamais n'arriver là, où vous allez sans cesse. Et si la compagnie vous peut soulager: le monde ne va-il pas mesme train que vous allez? (*D.M.*, p. 118; *V.S.*, p. 95.)

以上のように、死を末端とする生の道を人間が必然的に歩いているというイメージが、この章におけるモンテーニュの論の運びを容易にしているのである。

### 3. 人間の生き方／行き方：道と歩調

モンテーニュは「孤独について」の最後で、セネカがエピクロスの言葉を借りてルキリウスに名声欲を捨てて孤独の生活に入るよう勧める言葉を紹介する。その助言の一つは、野心を自律できるようになるまで自分の意図の監督者を常に念頭に置くことである。それをモンテーニュは次のように表現する。

Jusques à ce que vous vous soiez rendu tel devant qui vous n'osiez clocher: & jusques à ce que vous ayez honte & respect de vous mesmes, presentés vous tousjours en l'imagination, Caton, Phocion & Aristides, en la presence desquelz les fols mesmes cacheroient leurs fautes, & établissez les contrerolleurs de toutes voz intentions, si elles se detraquent, leur reverence les remettra en train. Il(*sic.*) vous contiendront en cete voie de vous contenter de vous mesmes, de n'emprunter rien que de vous, d'arrester & fermir vostre ame en certaines & limitées cogitations, où elle se puisse plaire, (I, 39, *D.M.*, pp. 381-382; *V.S.*, pp. 247-248.)

この箇所は『書簡』第25(5-6)からの借用であるが、セネカの原文には使用されていないにも関わらずモンテーニュは道と歩行の比喩を使っている。名声を求めず自分自身に満足して生きることを正道とし、野心に駆られることを歩行障害や正道からの逸脱と表現している。このように人間の生き方を道の行き方として捉える見方は、モンテーニュが人間を判断する際の重要な観点となる。

個々の人物がどのような人間であるかということに一貫して興味を抱き続け

るモンテーニュは、その人物がどのような業績を成し遂げたかということよりも、どのように生きたかということに強い関心を持つ。行為の結果は必ずしもその人物そのものを表さない。それは行為の相手や運命に大きく左右される。「人はいろいろな方法によって同じ結果に到達する」(I, 1)。「同じ意図から違った結果が出ること」(I, 24)も珍しくない。「運命はしばしば理性の歩みと合致すること」(I, 34)によって無分別な行為が上首尾に終わることさえある。そのうえ状況が人間に、その人の普段には見られない気分を誘発し突発的な行動を為さしめる。《l'étrangeté de nostre condition porte que nous soyons souvent par le vice mesmes poussés à bien faire, si le bien faire ne se jugeoit par la seule intention》(II, 1, *D.M.*, p. 7; *V.S.*, p. 336)。したがって、ある人物に関する判断をするにはその人の生き方をじっくりと吟味する必要がある。このような考えをモンテーニュは、人の生き方を行き方として捉えることによって表現する。その人の「足跡」を丹念に辿ることが必要だと言うのである。

Voilà pourquoy pour juger d'un homme il faut suivre longuement & curieusement sa trace si la constance ne s'y maintient de son seul fondement, si la varieté des occurrences luy faict changer de pas, (je dy de voye car le pas s'en peut ou haster, ou appesantir) laissez le courir, celui là s'en va à vaut le vent, comme dict la devise de nostre Talebot.(II, 1, *D.M.*, pp. 8-9; *V.S.*, pp. 336-337.)

プルタルコスの『対比列伝』はまさしくそのような関心に応える書物であり、これがモンテーニュの愛読書となった訳は容易に理解できる。プルタルコスは「些細な事柄や言葉や戯れ *une légère chose, une parole ou un jeu*」のほうが華々しい偉業よりもしばしば性格を明らかにするからと、歴史ではなく人生(生活)を書くこと、各人の生活と暮らし振りを描くことを意図しているからである<sup>12)</sup>。この『対比列伝』の中で、大事に臨んでも睡眠を妨げられなかった人の事例に幾つか出会ったモンテーニュは、そこに彼らのいつもの「歩調」を

見出し、それを稀有なことだと思う。なぜなら常に正道を歩むことだけでも珍しく、それこそが知恵の第一の目的であるが (II, 1, *D.M.*, pp. 2-3; *V.S.*, p.332), 歩調が変わることは賢者にも許されているからである。

*La raison nous ordonne bien d'aller tousjours mesme chemin, mais non toutesfois mesme train. Et ores que le sage ne doive pas donner aux passions humaines de se fourvoier de la droicte carriere, il peut bien sans interest de son devoir leur quitter aussi d'en haster ou retarder son pas, & ne se planter pas comme un Colosse immobile & impassible.*( I, 44, *D.M.*, p. 412; *V.S.*, p. 271.)

これらの節における道と歩調による表現は、ヴィレーが指摘するとおりセネカの『書簡』第20(2)の<<nec hoc dico, sapientem uno semper iturum gradu, sed una via.>>に典拠していると考えられる。人間の生き方を道として表現することは古代から行われてきた常套句だが、セネカはそれを利用して、「英知の最高の義務」が「言葉と行動が調和を保ち」「自己がどこにおいても自己自身と同等同一である」ことを、「賢者は常に同じ道を歩む」と表現している。だが同時に書簡の相手を励ますために、「賢者といえども常に同じ歩みを続けているとは言わない」と譲歩して見せている。この譲歩がモンテーニュに、道の比喩を越えて、人間の生き方を歩調として捉えさせている。

#### 4. 足取り

人間がどのような道を歩んでいるかという見方は、モンテーニュにおいてさらに、どのように歩んでいるかという見方に発展する。それは単なる歩調の遅速ではなく、どのような足取りかという見方にまで至る。行き方の比喩が徳に関する考察全体を支配している第2巻第11章「残酷さについて」の前半を最も顕著な例として取り上げよう。それはまず、「行為においては同じ道を行き同じ様相を呈している」が内面において異なる徳と善の区別から始まる。

*Il me semble que la vertu est chose autre & plus noble que les*

natureles inclinations à la bonté, qui naissent en nous. Les ames réglées d'elles mesmes & bien nées elles suivent mesme train, & representent en leurs actions mesme visage que les vertueuses. Mais la vertu sonne je ne sçay quoy de plus grand & de plus actif, que de se laisser par une heureuse complexion doucement & paisiblement conduire à la suyte de la raison. Celuy qui d'une douceur & facilité naturelle mespriserait les offences receues, feroit sans doute chose tresbelle & digne de louange, mais celuy qui picqué & outré jusques au vif d'une offence, s'armeroit des armes de la raison contre ce furieux appetit de vengeance & apres un grand conflict s'en rendroit en fin maistre, feroit sans doute beaucoup plus. Celuy là feroit bien, & cetui ci vertueusement. L'une action se pourroit dire bonté, l'autre vertu. Car il semble que le nom de la vertu presuppose de la difficulté du combat & du contraste: & qu'elle ne peut estre sans partie. (II, 11, *D.M.*, pp. 126-127; *V.S.*, p. 422.)

モンテーニュは、理性に導かれるがままの気負わない穏やかな善の行き方と、理性で武装して狂おしい情念と闘う徳の激しい克己の有り様との対比によって考察を始めている。同じ道を行っているように見えるが、内面は正反対である二者の対比がモンテーニュの考察を快調に進めている。

この対比に、慣用的な比喩として自然な形で考察の中に持ち込まれた道の比喩が加わることによって、より具体的なイメージが生まれることになる。「ストア派のみならずエピクロス派の中にも」と言いかけて、モンテーニュはしばし考察を中断し、二つの学派に対して世間一般になされている見解に異論を唱えるために、あるストア派の証言を引合に出す。

& un Stoicien (….) dict qu'il a laissé d'estre Epicurien pour cete consideration entre autres, qu'il trouve leur route trop hautaine & inaccessible. (*D.M.*, pp. 127-128; *V.S.*, p.422.)

route trop hautaine & inaccessible という表現自体は慣用的な言い回しであり、特にストア派に関しては常套的な表現である。だが闘う徳の考察が、試練を自ら求めねばならないと考えた哲学者たちがいる、という論へと進み、自ら清貧を求めたエパメイノンダス、妻の痲癩に耐え続けたソクラテスという実例と、生命の危険を省みず善事を為したメテルスの、危険のなかで善事を為すことが廉潔有徳の士の務めだという証言を経て、徳は困難との闘いを求めるという一応の結論に達した時、この道の比喩と、冒頭の行き方の比喩と闘いの比喩とが合体し、坂道を行く歩みぶりの二つのイメージが対比されることになる。

Ces paroles de Metellus nous representent bien clairement ce que je vouloy verifir, que la vertu refuse la facilité pour compaigne, & que cète aisée, douce, & panchante voie, par où se conduisent les pas réglés d'une bonne inclination de nature, n'est pas propre à la vraye vertu. Elle demande un chemin aspre & espineux, elle veut avoir ou des difficultez estrangieres à luitier, comme celle de Metellus, par le moyen desquelles fortune se plait à luy rompre la roideur de sa course, ou des difficultez internes, que luy apportent les appetits desordonnés de nostre condition. (*D.M.*, pp. 129-130; *V.S.*, p. 423.)

容易でゆるやかな坂道を行く善のイメージと対比された、険しい困難な道を自ら求めて行く真の徳のイメージは、セネカの英知 *sapientia* のイメージと関連がある。セネカにとって英知に近づくことは、高みを目指して山道を努力して登って行くことであり、運命 *Fortuna* を見下ろす高所に至った賢者は英知という難攻不落の要塞に守られるのである<sup>13)</sup>。セネカが頻繁に用いるこのようなイメージが、彼の著作を日頃から愛読しているモンテーニュに、上のような闘いのイメージと険しい道を行くイメージを用いさせたのだと推測できよう。しかしモンテーニュの道のイメージには目的地への言及がまったくない。どのような道を行くか、どのような歩みぶりをするかということに焦点が合っている。

さてここで、険しい道を困難と闘いながら行く徳の歩みとは相容れない、容易な坂道に行く善の歩みのほうにむしろ似ているソクラテスの徳の行き方が、それまでは安々と進んできたモンテーニュに別様の徳のイメージをもたらす。

Au train de sa vertu je n'y puis imaginer nulle difficulté & nulle contrainte: je connoi sa raison si puissante & si maistresse ches luy, qu'elle n'eut jamais donné moyen à nul appetit vitieux seulement de naitre. A une vertu si eslevée que la sienne, je ne puis rien mettre en teste: il me semble la voir marcher d'un victorieux pas & triumpnant, en pompe & à son aise sans empeschement, ne destourbier. (*D.M.*, pp. 130-131; *V.S.*, pp.423-424.)

闘いの相手である悪徳が生まれることさえできない、闘いを必要としない勝ち誇った歩みというこのイメージは、まさに歩みそのものに焦点が絞られていて、もはや道の描写は「障害がない」ということ以外必要としない。このソクラテスの徳のありように思い至ったことから、考察は「闘いの苦難」を伴わず快楽さえ感じているように思われる徳へと進む。そこから、小カトーとソクラテスにおける、その人の気質となるほど完全に習慣的に実践された徳という概念が導き出され、それがさらに「魂の自然で通常の歩調」と表現される。

C'est l'essence mesme de leur ame, c'est son train naturel & ordinaire. (*D.M.*, p. 134; *V.S.*, p.426.)<sup>14)</sup>

この son train naturel & ordinaire という一見簡素な表現には、モンテーニュの人間観察と判断の試みの経験が凝縮されている。

## 5. 判断の歩み、私の歩み

モンテーニュが『エッセー』を書く行為を「足」の比喩を用いて表現していることは拙論(1)において論じたが、この比喩は『エッセー』初版の段階からこの作品全体に及ぶ重要なモチーフとなっている。初版において「判断（あるいは生来の能力）の試し（の数々）」という意味で *essai(s)* に言及した箇所は5箇所

あるが、いずれも道や歩行の語彙を用いた叙述と連結している。

モンテーニュは「子供の教育について」の中で、【エッセー】で行っている「生来の能力の試し」における判断の働き方を覚束無い歩行として表現する。

Quant aux facultez natureles qui sont en moy, dequoy c'est icy l'essay, je les sens flechir sous la charge: mes conceptions & mon jugement ne marche qu'à taton, chancelant, bronchant & chopant: & quand je suis allé le plus avant que je puis, si ne me suis je aucunement satisfait. Je voy encore du païs au delà: mais d'une veüe trouble, & en nuage, que je ne puis desmeler,(I, 26, *D.M.*, p. 187; *V.S.*, p. 146)

また「デモクリトスとヘラクレイトスについて」の冒頭であらゆる主題を対象として判断を試すことを述べる時、モンテーニュが判断を用いて瀬踏みをしたり、判断が踏み固められた道を歩いたり、道を選んだりしている。

Le jugement est un util à tous sujets, & se mesle par tout. A cete cause aus essays, que j'en fay icy, j'y employe toute sorte d'occasion. Si c'est un sujet que je n'entende point, à cela mesme je l'essaie, sondant le gué de bien loing, & puis le trouvant trop profond pour ma taille, je me tien à la rive, & ceste reconnoissance de ne pouvoir passer outre, c'est un traict de son effect, voire de ceux, dequoy il se vante le plus. Tantost à un sujet vain & de neant j'essaye voir s'il trouvera de quoy luy donner corps, & dequoy l'appuyer & estançonner. Tantost je le promene à un subject noble & fort tracassé, auquel il n'a rien à trouver de soy mesme, le chemin en estant si frayé & si batu qu'il ne peut marcher que sur la piste d'autruy. là il faict son jeu à trier la route qui luy semble la meilleure, & de mille sentiers, il dict que cetuy cy ou celuy là a esté le mieus choisi. (I, 50, *D.M.*, pp.459-460; *V.S.*, pp.301-302.)

そのように判断を様々な事柄に試しているうちに、モンテニユは難題珍奇と思われた主題でも「一旦精神に道が開ければ」類例が数々見つかり、そうではないことが分かることを経験する。それが読者層の予想の論拠になる。

Mais par ce que apres que le pas a esté ouvert à l'esprit, j'ay trouvé, comme il advient ordinairement, que nous avons pris pour un exercice malaisé & d'un rare subject, ce qui ne l'est aucunement, & qu'apres que nostre invention a esté eschauffée, elle descouvre un nombre infiny de pareilz exemplés, je n'en adjouteray que cetuy cy: que si ces essais estoient dignes qu'on en jugeat, il en pourroit advenir à mon advis, qu'ilz ne plairoit guiere aus espritz grossiers & ignorans, ny guiere aus delicatz & savans. Ceux là ny entendoient pas assez, ceux cy y entendoient trop, ils trouveroient place entre ces deux extremités. (I, 54, *D.M.*, pp. 479-480; *V.S.*, p.313.)

自分が色々と試している判断の記録も、鈍重で物を知らない人々にはよく分からなくて、鋭敏な物知りには分かりきったことで喜ばれないだろうから、その中間の人々に喜ばれるだろう、と予測するモンテニユは読者の判断を意識している。しかしだからといって、「偉ぶろうとして躓いてばかりいる」術学者 (I, 25) のように「自分のものとなっていない」記問の学をひけらかすことは潔しとしない。むしろ自分の無知無学を殊更に強調し、知識には期待せず「自分自身のもの」である判断もしくは生来の能力を見てほしい、他者からの引用についてもその使い方を見てほしいと望む。「試し」への言及が、往々にして学問に関わる主題を扱う議論と連結しているのはこのためだ。上記の「子供の教育について」の冒頭はこのような文脈にあり、「書物について」の冒頭における言及も同様である。そして両者とも判断のあるがままの記録へと論が進む。

& laisse ce neantmoins courir mes inventions ainsi foibles & basses

comme je les ay produites, sans en replastrer & resouder les defaus que cete comparaison [entre les bons auteurs et moi] m'y a decouvers. (I, 26, *D.M.*, p. 188; *V.S.*, p.147.)

C'est icy purement l'essai de mes facultés naturelles, & nullement des acquises: (….) Qui sera en cerche de science, si la cerche où elle se loge. (….) Ce sont icy mes fantasies, par lesquelles je ne tasche point à donner à cognoistre les choses, mais moy. (….) Qu'on ne s'atende point aus choses, dequoy je parle, mais à ma façon d'en parler & à la creance que j'en ay. (….) Je n'ay point d'autre sergent de bande à ranger mes pieces que la fortune. A mesme que mes resveries se presentent, je les entasse: tantost elles se pressent en foule tantost elles se traient à la fille. Je veus qu'on voye mon pas naturel et ordinaire ainsi detraqué qu'il est. Je me laisse aler comme je me trouve, aussi ne sont ce pas icy articles de foy, qu'il ne soit pas permis d'ignorer & d'en parler casuellement& temerairement. ( II, 10, *D.M.*, pp. 98-101; *V.S.*, pp.407-409.)

判断の歩みがあるがままに記録する『エッセー』は、こうして著者自身の歩みを読者に呈示する書物となる。自分があるがままに低く評価する判断力に自惚れていることを逆説的に示す「自惚れについて」における「試し」への言及は、判断の試しという自己描写の誠実さを読者に保証するものとなり、自己を主題にするという考えを「行くがままにさせる」こともまた、ありのままの自己の歩みの描写となる。そしてその自己描写の価値の低さを判っているという論が判断の試しへの言及に連結する。

Mais quel que je me face connoitre, pourveu que je me face connoitre tel que je suis, je fay mon effect. Et si ne m'excuse pas d'oser mettre par escrit des propos si ineptes & frivoles que ceux icy. La bassesse du

subject, qui est moy, n'en peut souffrir de plus pleins & solides. Et au demeurant c'est un'humeur nouvelle & fantastique qui me presse, il la faut laisser courir. Tant y a que sans l'avertissement d'autrui je voy assez ce peu que tout cecy vaut & poise, & la hardiesse & temerité de mon dessein. C'est assez que mon jugement ne se defferre point duquel ce sont icy les essais(II, 17, *D.M.*, p.459; *V.S.*, p.653.)

人間の生き方を行き方として捉え、自己の判断の働き方もまた行き方として捉えるモンテーニュの、判断の歩みのあるがままの記録は、こうして自己の歩みのあるがままの描写となり、読者への献辞に呈示されることになる。

Si c'eust esté pour rechercher la faveur du monde je me fusse paré de beautés empruntées, ou me fusse tendu & bandé en ma meilleure démarche. Je veus qu'on m'y voye en ma façon simple, naturelle & ordinaire, sans estude & artifice: car c'est moy que je peins. (*D.M.*, *Au lecteur*; *V.S.*, p. 3.)

この短い文章の背景に、「銜学について」における「自分のものとなっていない」学識によって鎧った銜学者の姿や、「残酷について」における善や闘う徳や完全な習慣となり性格となった徳の行き方などを見ているモンテーニュの判断の経験を見て取ることができよう。人間の生き方を行き方として捉え、その歩みを見ることによって判断を試し、その判断の歩みのあるがままに記そうとする自己、その歩みを見るようモンテーニュは読者に望んでいるのである。このような作品の中に置かれることで、「見上げる目」も「見下ろす目」もきわめて特別な視線となる。

(続く)

## 註

- 1) 「モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目(1)」, 『広島大学文学部紀要』第55巻, 1995, pp.138-158. 【エッセー】からの引用については同稿註2を参照されたい。
- 2) 「モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目(2)」, 『広島大学文学部紀要』第56巻, 1996, pp. 269-289.
- 3) Roy E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne*, Genève, Droz, 1981, tome II, pp. 1365-1432.
- 4) Floyd Gray, *Le Style de Montaigne*, Nizet, 1958, pp.170-171.
- 5) Michel Eyquem de Montaigne, *Essais*, reproduction photographique de l'édition originale de 1580 publiée par Daniel Martin, 2 vols., Genève/Paris, Slatkine/Champion, 1976. Michel Eyquem de Montaigne, *Essais*, reproduction photographique de l'édition originale de 1588 publiée par Daniel Martin, Genève/Paris, Slatkine/Champion, 1988. Michel de Montaigne, *Essais*, reproduction en fac-similé de l'Exemplaire de Bordeaux 1588 annoté de la main de Montaigne, 3 vols., Genève-Paris, Slatkine, 1987.
- 6) *Les Essais* de Michel de Montaigne, 5 volumes en 3 volumes, III(V), *Lexique de la langue des Essais* par Pierre Villey, Hildesheim-New York, Georg Olms Verlag, 1981, p. 407.
- 7) Joseph Coppin, *Montaigne traducteur de Raymond Sebon*, Lille, H. Morel, 1925, p. 84.
- 8) Raimundus Sabundus, *Theologia naturalis seu Liber creaturarum*, Faksimile-Neudruck der Ausgabe Sulzbach 1852 mit literargeschichtlicher Einführung und kritischer Edition des Prologs und des Titulus I von Friedrich Stegmüller, Stuttgart-Bad Cannstatt, Friedrich Frommann Verlag (Günther Holzboog), 1966, Titulus XCI, pp. 113-114; *La Théologie naturelle de Raymond Sebon*, in *Œuvres complètes de Michel de Montaigne*, Conard, 1932, tome IX, p.145.
- 9) A:train → C:voye (II, 18, p.667); A:demarche → C:marche(*Au lecteur*, p. 3; I, 47, p. 284); B:demarche → C:marche(III, 12, p. 1049); A:pas → C:marches (II, 12, p. 559); B:train → C:cours(III, 9, p. 954); B:ordre → C:train(*ibid.*). (頁は V.S.)
- 10) Cf.I, 24, p.132; 57, p.326; II, 3, p.352; 6, p.371; p.372; 13, p.609; 35, p.745; 37, p.759; p.764, etc. (頁は V.S.)
- 11) Cf. Mireille Armisen-Marchetti, *Sapientiae Facies*, Les Belles Lettres, 1989, pp.169-171, 261-263, 269-270.
- 12) Plutarque, *Les Vies des hommes illustres*, traduction de Jacques Amyot, Gallimard, 1951, tome II, p. 323.
- 13) Cf. Armisen-Marchetti, *op. cit.*, pp.269-270.
- 14) この箇所は V.S. ではテキスト C になっているが実際はテキスト A.

## Montaigne, regard vers le haut, regard vers le bas (3)

Mariko OKUMURA

### III. Images de la marche dans la première édition des *Essais*

Montaigne emploie souvent au sens figuré des mots qui désignent au sens propre l'action ou la manière de marcher ou l'espace à parcourir pour aller quelque part. De fait, ces images remplissent une grande fonction dans la pensée de Montaigne qui *essaie son jugement* de la vie humaine et de la manière de vivre des hommes. Les images du *chemin de la vie* qui aboutit à la mort et du *passage à la mort*, quoiqu'elles soient des lieux communs, elles facilitent son argumentation. La *voie* qu'un homme prend et sa *démarche* sont les critères les plus importants quand Montaigne essaie d'en juger. Enfin, quand il fait mention de(s) *essai(s)* de son *jugement* ou de ses *facultés naturelles*, il décrit ses manières de juger et d'en enregistrer les résultats en utilisant des images du chemin et de la manière de marcher. C'est ainsi que dans l'avis au lecteur, l'auteur insiste sur la peinture du moi qui n'est pas *tendu et bandé en sa meilleure démarche* mais qui veut être vu *en sa façon simple, naturelle et ordinaire*. Dans cette œuvre où non seulement les objets de jugement mais aussi le sujet jugeant se décrivent par les images de la marche à terre, celles du *regard vers le haut* et du *regard vers le bas* deviennent particulières.

(à suivre)